

印象記

大杉 栄

中村武羅夫

印象記 大杉 栄

一

初め私と喧嘩して、それから親しくなったのは大杉栄と、岩野泡鳴と、二人である。どちらにも似たような、気持ちのさっぱりした男だった。大杉は、自分では肺が悪く、いようにいっていたが、そして、よく検温器なんか腋に挟んで、熱を気にしたり、そのころ新しく出来たの、ツベルクリンとか何とかいう注射などしてもらいに、神田の方の医者にかよっていたが、しかし、見たところは

骨つ節の頑丈な、色の黒い男だった。事実、肺なんかもそんなに悪かったのかどうか、肺が悪いの腸が悪いのといいながら、その一方では、神近市子氏との日蔭の茶屋でのような事件を起こしたり、牢にもは入ったり、伊藤野枝とあんな風と一緒にあって、二三人も子供をうんだり——とに角、精力家だった。そんな点も、泡鳴とちよつと似ている。泡鳴のことは後で書くが、彼れもなかなかの精力家だった。そういえば、女房を二三度も取りかえたり、それも多くの人々のように、こそ、こそと世間にかくれてではなく、大っぴらに実行するところなども、

よく似ている。とにかく、大杉と泡鳴とは、その体質にも、性格や気質にも、どこか似通うたところがあった。その二人が、おなじような非業の死を遂げてしまった。

——尤も、泡鳴は腸チブスで、大学病院にまで入院して死んだのだが、私には、彼れの死が、何だか普通の死のような感じがしないのである。あんなに丈夫で、精力的だった彼れが、あんなにたわいなく死ぬのは、どうしても自然の死という気はしない。殊に、泡鳴の死因には、かなりな無理があったような噂だ。林檎を食って、腸に二銭銅貨ぐらいな穴が開いてたなぞも、如何にも泡鳴ら

しい気はするのだが、そんなことも何か非業の死という気がする。

私は、二人の生前、この二人に大いに論争させたら面白かろうという気がして、大杉に思い切った「岩野泡鳴論」を書くことを頼んだ。大杉も泡鳴には大いに興味を持っていて、乗り気になって引受けてくれたが、そして大杉は、泡鳴の全著作を読んだりなどして、苦心惨澹してくれたが、遂に思うような「泡鳴論」が出来ずにしまった。大杉は泡鳴のことを、偉大なる馬鹿というのである。結局、そういう意味のことを、極く簡単に書いてし

まっただけだった。私が、泡鳴に、今度大杉が、泡鳴のことを偉大な馬鹿として大いに書くそうだから、それを見た上で、何かいうことがあったら、是非書いてほしいと、大杉の「泡鳴論」が出来る前に話すと、「そうか、大杉が僕のことを書くのか、それは面白いだろう。僕のことを、偉大な馬鹿だって？ わっはッははッは。いいいたいことがあったら、僕も書くよ。」と、ちっとも蟠りのない泡鳴は大笑いして、手ぐすね引いで待っていたが、遂に大杉の方で、予期したほどのものが出来ずにしまった。

大杉には、「武者小路実篤論」を頼んだこともある。

あんな風に見えても、大杉は、筆を取ることは、なかなか細心だったし、人物論など書く場合には、殊におろそかにはしなかった。「武者小路論」を書くにしても、その全部の著作に目を通すは勿論、わざわざ武者小路に会いに行ったりするような、用意周到なところがあった。

比較したついでにいうと、大杉と泡鳴とくらべて考えて見ると、よく似てはいるが、世間的には大杉の方が、大分伶俐だったように思う。

その大杉と私とが、親しくなった動機は、喧嘩なのである。私が、そのころ「新潮」で有名だった不・同・調に、

「大杉の馬鹿野郎！」と書いて、ひどく大杉を罵倒したのである。それを大杉自身が心から怒ったかどうかは知らないが、彼れの周囲のものがひどく憤慨して、私を殺すとか、片輪にするとかいうことになった。

二

なぜ、私が、大杉のことを「大杉の馬鹿野郎！」と罵倒したかというところ土岐哀菓氏がやっていた「芸術生活」というひどく高踏的な雑誌に、大杉栄が「籐椅子の上で」という題で、雑文を書いた。感情家の私は、

第一、大杉が、「籐椅子の上で」というような、ブルジョア臭の紛々たるハイカラな題で書くことが気に入らなかつた。その上「オイ、土岐。」というような、文章の調子が、私にはキザで鼻持ちがならない気がしたので、それで向かつ腹を立てて、大いにやつ付けたのである。

——そこで、大杉の友人や、乾分こぶんたちが僕を怒つた。殺すとか、片輪にするとかいうことになつた。

そういう評判が専らになつて、心配してくれたのは生田長江氏である。尤も長江氏も多分の弥次馬性の所有者だから、私が大杉一派と喧嘩して、片輪になることくら

いを心配してくれたのではない。大杉と私とは、元来一度会えば、きつと、肘を取って談ずるような仲になるべき人間なのに、会わない為に、私の方ではキザな奴だと反感を持ってるし、大杉の方でおこってるのは、つまらないから、兎に角、一度会って見ろというのである。その上で、どうしても喧嘩しなければならぬようだったら、死ぬまでだって、勝手に喧嘩すればいい。介添いくらいな役は、自分がつとめてもいいというのである。そこで長江氏が、私と大杉との間に立って、大いに斡旋してくれて、二人が会見することになった。

考えて見ると私は、喧嘩では幾度か長江氏の厄介になった。原因は皆不同調である。遠藤清子が泡鳴とわかれした後、私は清子の悪口を、やっぱり不同調に書いて、そのために清子から訴えられた時にも、生方敏郎氏とおなじ事件が起こった時にも何時でも仲に立って奔走し、円満に解決してくれたのは生田長江氏である。不同調では、よく人から怒られたり、訴えられたり、喧嘩したりしたが、私のために心配したり、奔走したりしてくれたのは、何時でも長江氏と秋声氏とである。その点でこの二先輩に對してだけは、私も、悪口を封じている……その、い

ろいろな文壇人の宿怨重なる不同調を創刊するに際して、私が頭をわられて血塗れになったのも、人に怨みがあるものかないものか、皆自分のまいた因縁がむくって来たのだと、私だけはそう思っている。

話しが傍這にそれたが、私は、わざわざ私の家まで出向いてさそってくれた長江氏と一緒に、大杉の家を訪問した。元より何等宿怨のある間柄ではない。大杉の気性はあの通りだし、私の気性はこの通りだし、すぐ打ちとけてしたしくなった。殊にその当時大杉の細君だった堀保子は（この女も今は死んだ）、ひどく私の気に入った。

私もその自分はもう女房持ちだったが、保子を見て、こんな女は女房にいいなあ、と思った。夕方まで話し込んで、夕飯を共にして帰って来た。その時、荒畑寒村氏にも会って、同氏ともしたしくなった。子のない荒畑氏夫妻も犬煩惱なら、私も女房も犬煩惱で、しまいには荒畑氏の牝犬と私のうちの牝犬と、姻戚関係を作らせたりした。その私の牝犬は、今、アメリカに行ってしまった田村俊子氏から、手毬くらいな仔犬の時分に、七円で買って来たものである。その時分の七円は、私なんかの境遇ではなかなか大金だった。私は金が足りないので、女房

の着物を質に置いて、俊子氏からその仔犬を買って来たのであった……

それから大杉は、外国に脱出した年まで、ちよいちよ
い私の家に来てくれた。新潮社から「種の起原」や「懺
悔録」の翻訳を出したり、その他二冊の評論集を出した
りするようになったのは、私と彼れとの交遊が縁故であ
った。放膽なようで、どこか人の家庭などに対しては、
こまかな人情味のある男だったが……

日本文学電子図書館

文壇隨筆

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮社

大正14年11月10日 印刷

大正14年11月15日 発行

日本文学電子図書館